公認会計士「研修出向制度」体験者リポート

vol. 5　取材・文／高橋光二　撮影／大平晋也

新日本有限責任監査法人が2010年にスタートさせた、一般事業会社への会計士「研修出向制度」。本制度を活用し、自己成長に励む公認会計士たちのリアル・リポートをお届けする。

自分の未来を輝かせるため、感謝されるこの仕事を通じ、税務知識と英語力を磨く

富士重工業株式会社　財務管理部
高橋正嗣●30歳

数字をつくる側の仕事を経験しようと応募

――はじめに、公認会計士を目指した経緯をお教えください。

高橋　大学に入学してすぐ、簿記の3級、2級を取得する課外授業を履修しました。就職に役立ちそうとの考えからです。そうしたら、大学のほうから「授業料を負担する制度があるから、専門学校に通って公認会計士資格を取得してみないか？」と。その時初めて公認会計士の存在を知りました。1年間ほど専門学校に通い、その後も毎日13時間ぐらい勉強して4年の11月に一発で第二次試験に合格しました。

――すごい勉強ぶりですね。

高橋　お金を出してもらうからには真剣にやらないと申し訳ないというプレッシャーがありました。通学する電車の中でも電卓叩いていましたね（笑）。

――新日本監査法人ではどんな業務を担当していたのでしょうか？

高橋　当時J-SOX法が成立したばかりで、新日本にも情報システム監査の部署ができ、そこに在籍となって内部統制の業務が6割ぐらいを占めました。会計士資格取得で勉強してきた知識が生かせることがほとんどないので初めはつらかったですが、情報システムに詳しい上司に学びつつスキルを身につけていったという感じです。今からすれば、会計士はシステムに弱い人が多いので、真っ先にシステム監査にかかわれたのはよかったと思っています。それ以外に、3社の主要クライアントの監査業務も担当しました。

――出向制度に手を挙げたのは？

高橋　今回の研修出向制度ができたことを知り、すぐ手を挙げました。3年目ぐらいから監査業務が増え始めて、当時は7割ぐらいを占めていました。その頃感じていたのは、監査業務を4年経験してだいたいの流れがわかり、監査はでき上がっている数字をチェックする仕事であって、これから先も同じことの繰り返しであるということ。もっと新しいことを経験してみたい、事業会社に出向して数字をつくる仕事にかかわりたいと。単に数字をチェックするだけなら、極論するとビジネスのことを知らなくてもできる。そうではなく、数字の裏にあるビジネスの本質についても理解したいと思ったわけです。

様々な職種の社員と対話し、知識を深めていく毎日

――富士重工業では、どんな仕事をされているのでしょうか？

高橋　主にIFRS対応プロジェクトと税務業務にかかわっています。どちらも監査法人で研修を受講していたテーマですが、業務として本格的に取り組んだのは初めてのことです。前者では、社内外の関係者で2016年から日本企業にも適用される予定のIFRSを研究し、どこにどのような影響が及ぶのか、適用するためには何が必要なのかといったことを割り出して、その準備を進めています。後者では、当社が11年度の決算から連結納税制度を適用することになったので、それによってどのような影響が出るのか調査したり、社内からの相談に対応するといった業務を担当しています。

――どういった相談があるのですか？

高橋　連結納税を行うとなると、当然ですが子会社にも影響が及ぶことになりますから、ディーラーを支援する部署の担当者から「具体的にどんな負担が生じるのか知りたい」といった問い合わせが入ります。

――自動車メーカーの財務にかかわって、何か特徴的なことを感じますか？

高橋　監査法人で担当したのは国内企業が多かったせいか、当社は輸出が多いので為替への感応度が高いことを実感しています。新聞でも報道されていますが、この円高局面では海外生産を増やさなければ収益を圧迫されるため、当社も中国での生産を始めるプロジェクトが進んでいます。そんなグローバル感は、この会社に出向できたからこその醍醐味だと思っています。

――監査法人と一般企業の違いとは？

高橋　監査法人はマニュアルが整備されていて、大抵のことは調べればすぐにわかるようになっていますが、一般企業では答えがないことも多いですね。自分で調査し、関係者に相談しつつ答えを出していくという感じです。大変ではありますけど、いろいろな人の考え方の違いがわかる面白さがあります。また、相手にわかりやすく話すようになりました。監査業務では、あまり感謝されるという経験がありませんでした。こちらでは、自分の仕事で感謝される。それがうれしいですね。

――残りの出向期間でどんなことを身につけたいと考えていますか？

高橋　IFRS対応で海外子会社と直接やりとりすることが増えているので、今、英会話を勉強しています。ネイティブとストレスなく会話できることが目標です。あと、せっかく税務を勉強していますから、税理士の資格を取りたいです。

――最後に、後進へのメッセージを。

高橋　監査の仕事で対応するのは、ほぼ経理財務の方々でしたが、こちらでは営業や生産、海外子会社といろいろな職種の社員と仕事ができます。自分でいうのもなんですが、人としての幅が広がっている気がしています。どんな公認会計士であっても、事業会社での勤務経験はむだにはならない。まずは私自身が、それを証明しなくてはと思っています。

Masatsugu Takahashi
Profile

1981年3月20日	東京都杉並区生まれ
2004年11月	公認会計士第二次試験合格
2006年3月	日本大学法学部卒業
4月	新日本監査法人入所
2010年7月	富士重工業株式会社へ出向

家族構成＝独身

出向受け入れ企業の声

プロフェッショナルとして社内にいい刺激を与えている

富士重工業株式会社
財務管理部長
澤村 治氏

今、財務管理部の課題は大きく2つある。1つは、グローバル化を進めるにあたり、それを支えるスタッフが昔ながらの要素を残している点。特に、IFRSへの移行もにらんで、海外と直接コミュニケーションできる人材を育成する必要がある。もう1つは、社内全体の経理スキルの向上。そういった諸問題を改善していくうえでも、高橋君には大いに期待している。彼の活躍を見て、昨年の7月にもう1名出向者を受け入れたが、社内でたった二人しかいない公認会計士の専門知識を享受できるメリットは大きい。

また、この二人のプロフェッショナルの存在は、社内の、特に同年代の社員にいい刺激を与えていると思う。事業会社での経理業務経験がないうえに、人から先生と呼ばれることが多い会計士を迎え入れるに際して、組織マネジメント上の心配もあったが、実際はまったく問題ない。この3年間を有意義に使って、素晴らしい公認会計士に育ってほしい。